

一般教育における「総合基礎科目」 の役割—その 3—

永田 照子 小川真理子

I. はじめに

平成3年の大学設置基準の大綱化により、一般教養課程の教育もかなり自由に考えられるようになった。

本学においてもこれを受けてカリキュラムの見直しが行われ、一般教養課程の人文科学・社会科学・自然科学の単位の枠がはずされたが、本学は秘書科という性質上、これまでの一般教養課程で培われるような幅広い教養・知識を有していることは非常に重要である、との観点から、基礎・教養科目(これまでの一般教育科目に当たる)に、一つのテーマのもと、それに対して人文科学・社会科学・自然科学のそれぞれの視点で論ずる科目、すなわち「総合基礎科目」が設置された。

総合基礎科目は平成5年度より始められ、初年度のみ一人の講師による講義であったが、次年度からはそれぞれの専門分野の講師によるオムニバスの講義となっている。

一つのテーマのもとでわかりやすい身近な事例から問題に接近する講義を受講することは、学生個人にとって苦手だと思いこんでいた領域に興味・関心を持つという意味で意義深いのではないかと思われる。と同時にひとつの問題に対して種々の分野からの研究が可能であることも理解できるのではないかと期待される。

また、大学以外の場所で活躍している講師も招くことによって、さらに講義に幅が広がることが期待される。

5年目を迎えた平成9年度より総合基礎科目の成果と役割、今後の問題などを考察する目的で受講生の受講前の態度、受講後の意識・態度の変化などについて調査を実施してきた。

また、平成9年度より「総合基礎科目」を本学の周辺地域に在住する社会人参加の公開授業とし、地域との交流の場としての役割を担うことになったこともあり、社会人の受講者への調査も別途実施している。

平成9、10年度の報告^{1,2)}に続いて、本年度は一般教育における「総合基礎科目」の役割、意義、さらに社会人への公開の意味などについて考察を試みたいと思う。

その目的のために本年度も総合基礎科目のシリーズの受講前と受講後に、受講生には意識・態度の変化などについて調査を実施し、社会人の受講者には受講後アンケート調査と懇談会を開いて感想、意見を聞いた。

これらの結果を中心にして検討する。

II. 平成11年度における総合基礎科目について

本年度のテーマは昨年度に続いて『輝く女性の時代に！』とした。いよいよ間近に迫った21世紀を女性として前向きに積極的に輝いて生きて欲しいとの願いを込めたものであった。特に本年度は講師に世代の異なる女性の方々(30代～70代)をお招きして、年代、時代を背景とした生き方の違いなどをテーマのお話と共に話していただき、受講生がどのようにそれらを受けとめるか、理解するかがポイントでもあった。

さらに、今後問題になると思われる環境問題、情報化社会の問題、ボランティアの問題もとりあげることとした。

テーマ：『輝く女性の時代に！』

各回の題：「映画の中の女性—女性はドラマティック—」

講師：遠藤三郎（東京工芸大学芸術学部教授）

：「新しい私をもとめて」

講師：永井恵津子（本学第5期卒業生—NHK生活ほっとモーニングレポーター）

：「活かして生きる」：障害を乗り越えて

講師：萩生田千津子（車椅子女優）

：「動物大好き、自然大好き」：ケニアの自然と動物たち

講師：平岩雅代（動物写真家）

：「書くことに出会った日」

講師：宮川ひろ（童話作家）

：「私らしさの演出」

講師：武居よし子（カラーコーディネーター）

- ：「インターネットとビジネス」
講師：大島 武（本学助教授）
- ：「情報化社会の行方―誰でも使える，誰でも楽しめる―」
講師：関根千佳（(株)ユーディット代表取締役）
- ：「生活の中のダイオキシン」
講師：飯塚堯介（東京大学農学部教授）
- ：「私の歩んだ道と秘書の仕事」
講師：山川栄子（(株)コニカ秘書室）

初回にはオリエンテーション，最終回にはまとめを実施した。

各回ごとの講義レポート（講義に対する感想・意見・質問など）と期末のレポート（テーマに関連する問題を一つ取りあげ，関連する本を読んで講義と関係づけ，自分の考えを論述するもの）の提出を求めた。

本年度の学生の受講者数は 266 名，社会人の参加は 30 名であった。

III. 総合基礎科目『輝く女性の時代に！』における調査について

調査は，受講生を対象に受講前と受講後の 2 回アンケート方式で行い，受講前の態度・意見と受講後の態度・意見，さらにその変化について調べることにした。なお，社会人の受講者には別途受講後に懇談会を催し，アンケートとともに感想・意見を聞いた。

1. 受講前の調査

調査項目は，平成 9，10 年度との比較をする意味でいくつかの項目は同じものが用いられた。すなわち，21 世紀についても持っている不安，希望，さらに環境問題，社会問題についても持っている関心，情報社会への興味などである。その他，女性の生き方に関する項目も前年度に続いて用いられた。さらに，本年度はボランティア活動や環境ホルモン，リサイクルへの関心がたかまりつつある社会状況のなかで，それに関わる講師をお招きしたこともあり，ボランティアについての項目，リサイクルや環境への配慮についての項目が加えられた。

2. 受講後の調査

調査項目は，本年度の総合基礎科目のシリーズで関心を持った問題，受講後の認識・態度の変化，21 世紀を輝く女性の時代とするために持っている現在の気持，現代社会で最も重要なこと，などであったが，これらのなかの数

項目は、平成9、10年度と同じものであり、また数項目は受講前と同じ項目にして受講前後の変化を調べることにした。

3. 社会人の受講者に対する調査

社会人の受講者には時間的な制約もあり受講後のみの調査とし、このシリーズで関心を持ったテーマ、受講後の感想、学生の態度、などについて調べることにし、その他については懇談会で意見を聞くことにした。

IV. 調査の結果について

1. 受講前の調査

1) 21世紀への不安について（表1）

21世紀への不安については、環境破壊、地震・災害、経済の行き詰まりの順で多く、これら3項目で8割を占めている。これら上位3項目の順序は平成9、10年度の結果と変わらない。環境破壊の問題は学生にとっても深刻さの増すものとして受けとめられている。一方、経済の行き詰まりの割合が僅かずつではあるが増加しているのは現在の日本の厳しい経済状況を反映しているものと考えられる。

表1 21世紀への不安（3つまで回答可）

	平成11年 (%)	平成10年 (%)	平成9年 (%)
環境破壊	167 (31.6)	147 (29.3)	205 (32.5)
地震・災害	142 (26.9)	112 (22.4)	157 (24.9)
経済の行き詰まり	112 (21.2)	92 (18.4)	77 (12.2)
エイズのまんえん	32 (6.1)	17 (3.4)	43 (6.8)
エネルギーの不足	31 (5.9)	39 (7.8)	62 (9.8)
社会保障の先細り	31 (5.9)	37 (7.4)	46 (7.4)
戦争	10 (1.9)	39 (7.8)	40 (6.3)
人口の増加	3 (0.6)	18 (3.6)	— (—)
延べ回答数	528	501	630

2) 21世紀への希望について（表2）

生活の豊かさ、宇宙への進出、環境整備の順となっている。9、10年度1位の環境の整備と入れ替わって生活の豊かさがトップになっているが、環境の整備への希望もさることながら、生活の豊かさを願っているということであろうか。前項の経済の行き詰まりに対しての願望であろうか。宇宙への進出が上位にあがっているのは、再度の向井千秋さんの活躍があったからと思わ

表2 21世紀への希望（3つまで回答可）

	平成11年 (%)	平成10年 (%)	平成9年 (%)
生活の豊かさ	121 (22.4)	64 (15.3)	104 (17.5)
宇宙への進出	95 (17.6)	70 (16.7)	77 (13.0)
環境整備	91 (16.9)	80 (19.1)	124 (20.9)
科学技術の発達	75 (13.9)	54 (12.9)	76 (12.8)
女性の地位の向上	67 (12.4)	69 (16.5)	84 (14.1)
国際交流の発展	64 (11.9)	62 (14.8)	86 (14.5)
開発途上国の発展	27 (5.0)	20 (4.8)	43 (7.2)
延べ回答数	540	419	594

れる。

3) 環境への関心（表3）

平成9, 10年度と同様, 地球温暖化, オゾン層の破壊, 空気・水の汚染の3項目が上位である。9, 10年度に環境ホルモン, ダイオキシンの項目を設けなかったため, 今年度もその項目が設けられていないが, 空気・水の汚染の中にある程度含まれていると考えられる。今年度の受講生の数が平成9, 10年度と比較して少ないにもかかわらず今年度のこの項目に対する延べの回答数が611と多いのは（受講生：9年=319名, 10年=289名, 11年=266名）, 環境問題への関心の強さを示していると考えられる。

表3 環境問題への関心（3つまで回答可）

	平成11年 (%)	平成10年 (%)	平成9年 (%)
地球の温暖化	138 (22.6)	109 (23.5)	113 (17.2)
オゾン層の破壊	131 (21.4)	87 (18.8)	131 (20.0)
空気・水の汚染	129 (21.1)	97 (21.0)	138 (21.0)
リサイクル	77 (12.6)	61 (13.2)	97 (14.8)
動物の絶滅	58 (9.5)	48 (10.4)	66 (10.1)
身近な自然の消滅	56 (9.2)	36 (7.8)	83 (12.7)
熱帯雨林の破壊	20 (3.3)	25 (5.4)	28 (4.3)
その他	2 (0.3)	— (—)	— (—)
延べ回答数	611	463	656

4) 社会問題への関心（表4）

ファッション, 景気, 少子化現象の順位で, 身近な問題への関心が高い。過去2年の調査と大体同じである。その他の社会問題へも目を向けて欲しいところであるが, 短大入学後間もない時点では無理もないことなのであろう。

表4 社会問題への関心 (3つまで回答可)

	平成11年 (%)	平成10年 (%)	平成9年 (%)
ファッション	144 (26.1)	80 (20.5)	115 (21.9)
景気	142 (25.8)	108 (27.7)	122 (23.2)
少子化現象	70 (12.7)	63 (16.2)	88 (16.7)
難民	53 (9.6)	24 (6.2)	65 (12.4)
異文化の交流	42 (7.6)	35 (9.0)	41 (7.8)
セクハラ	41 (7.4)	33 (8.5)	28 (5.3)
ホームレス	31 (5.6)	20 (5.1)	39 (7.4)
経済摩擦	20 (3.6)	27 (6.9)	28 (5.3)
その他	8 (1.5)	— (—)	— (—)
延べ回答数	551	390	526

短大での一般教育（教養・基礎）の役割がまずこの辺りからあると思われる。

5) 情報社会への関心 (表5)

インターネットが群を抜いてトップで、次いでパソコン通信である。この傾向も過去2年と同様である。コンピュータで絵を描くが若干昨年より増えている。これらの結果は高校あるいは中学でのコンピュータ教育の普及の影響かとも考えられる。

表5 情報社会への関心 (複数回答可)

	平成11年 (%)	平成10年 (%)	平成9年 (%)
インターネット	215 (44.5)	162 (40.9)	228 (43.6)
パソコン通信	116 (24.0)	108 (27.3)	57 (30.0)
コンピュータで絵を描く	49 (10.1)	34 (8.6)	43 (8.2)
コンピュータによる作曲・演奏	46 (9.5)	35 (8.8)	35 (6.7)
動画(アニメ・映画)の作成	35 (7.2)	33 (8.3)	33 (6.3)
電子出版(編集・出版など)	21 (4.3)	24 (6.1)	27 (5.2)
その他	1 (0.2)	— (—)	— (—)
延べ回答数	483	396	523

6) ボランティアについて (表6および7)

兵庫県南部地震以後ボランティアへの関心、意識が高まりつつある。今後ボランティアの重要性は増大するであろう。短大生がどの程度ボランティアの経験があるのか、関心があるのかをまず知ることから始めようと、この項目を設定した。

経験の有無については、定期的にしていて、と、経験したことはある、を足しても35.2%である。この数字を少ないと見るか、まあまあと見るか判断

表6 ボランティアの経験について (%)

やりたいと思ったことはあるが実行したことはない	54.2
経験したことはある	32.2
ボランティアについて考えたことはない	10.6
定期的にしてきた	3.0

表7 やってみたいボランティアについて (%)

環境ボランティア	20.9
介護ボランティア	19.9
海外ボランティア	19.5
国際交流ボランティア	15.9
募金活動	12.3
災害ボランティア	11.6

が難しい。やってみたいボランティアは特にいずれかに集中するということもなく多岐にわたっている。ということは目的意識がそれほど明確ではないともいえる。ボランティアに対する関心をもっと高める必要がある。

7) 母親（最も身近な女性）の状況（表8）

パートタイムで仕事，家事中心，フルタイムで仕事，の順であった。この項目は母親の生き方が娘（受講生）の将来の生き方といかなる関わりを持つかをみるためのものでもあった。

表8 母親（最も身近な女性）の状況 (%)

パートで仕事	37.3
家事中心	24.0
フルタイムで仕事	21.3
趣味を楽しむ	12.5
ボランティアで活躍	2.8
生涯学習	1.0
その他	1.0

8) 将来の生き方（表9）

フルタイムであれ，パートタイムであれ，仕事（最も身近な女性）にずっと関わっていきたいとする人は約70%である。この項目は前項の母親の生き方との関係を見るためと，さらには同じ項目が受講後にも設けられ，受講の前後で意識・態度がどのように変化するかを調べるためでもあった。意識・態度の変化については後で述べることにする。

表9 将来の生き方 (%)

項 目	受講前	受講後
育児から手が離れたらパートタイムの仕事につきたい	48.4	45.1
結婚・出産に関わらず仕事を続ける	18.4	17.6
結婚後、出産したら仕事はずっと辞める	14.5	6.4
結婚したら仕事はずっと辞める	12.1	5.2
育児から手が離れたら再びフルタイムの仕事につきたい	3.1	15.0
結婚・出産に関わりなく仕事にはつきたくない	2.0	1.3
その他	1.6	9.4

表10 母親の状況と娘の将来の生き方の関係 (表8と9のクロス) (人数)

娘の将来の生き方	母親の状況						
	パート	家事中心	フルタイム	趣味	ボランティア	生涯学習	その他
育児から手が離れたらパートタイムの仕事につきたい	67	17	18	9	2	0	2
結婚・出産に関わらず仕事を続ける	15	8	17	3	0	0	1
結婚後、出産したら仕事はずっと辞める	11	5	16	3	1	1	0
結婚したら仕事は辞める	10	10	5	5	0	1	0
育児から手が離れたら再びフルタイムの仕事につきたい	0	4	2	1	0	0	0
結婚・出産に関わりなく仕事にはつきたくない	1	1	1	0	0	0	0
その他	0	2	1	1	0	0	0

9) 母親 (最も身近な女性) の状況 (生き方) と娘 (受講生) の将来の生き方の関係 (表8と表9のクロス) について (表10)

母親がフルタイムの仕事についている場合には娘も仕事をずっと続けたいと考えている人が多く、母親がパートタイムの仕事についている場合は娘もパートタイムで仕事をと考えている人が多いことがわかった (尤度比検定の結果1%レベルで有意)。母の影響は少なからず存在するのである。その他については統計的に一定の関係があることは有意にはならなかった。

2. 受講後の調査について

1) 今年度のシリーズで最も関心をもったテーマ (表11)

「活かして生きる」が最も多く、次いで「私らしさの演出」、「新しい私をも

表 11 本シリーズで最も関心のあったテーマ (%)

活かして生きる	34.6
私らしさの演出	27.4
新しい私をもとめて	14.5
動物大好き，自然大好き	6.0
私の歩んだ道と秘書の仕事	4.3
生活の中のダイオキシン	3.8
インターネットとビジネス	3.4
映画の中の女性（女性はドラマティック）	2.6
書くことに出会った日	2.1
情報化社会の行方	1.3

とめて」であった。「活かして生きる」は、新劇女優としてこれからというときに交通事故によって車椅子の生活となり、どん底の状態から再び車椅子女優として活躍するようになるまでの生きざまを迫力ある語り口で話された。子供時代の友達関係，親子関係，先生との関係，その中で女優を目指すことにした過程も学生にとって興味あふれるものであった。そして事故後の復帰の過程でのさまざまな人との出会い，励まし，家族関係などの体験談は聞いている人の心を揺り動かさずにはおこななかった。また，ボランティアのあり方についても，助けを受ける側からの発言があり有意義であった。講義後のレポートにも多くの質問が寄せられたので，それに答えるため最終の授業時に再び来校してくださった。女性の生き方として非常にインパクトの強い話であった。「私らしさの演出」は，私らしさを演出するためのカラーコーディネートの話と実習でファッションとも関わる身近な問題として関心が集まった。「新しい私をもとめて」は，それほど年齢も離れていない自分たちの先輩が本当にやりたい仕事（アナウンサー，語り）を目指して頑張り，目的とした仕事にたどり着くまでの紆余曲折，さらにその過程での結婚，そして間もなくおとずれの出産の話は，受講生たちに自分たちも頑張れば・・・という気持ちを植えつけたようであった。

そのほか、「動物大好き，自然大好き」，「私の歩んだ道と秘書の仕事」，「書くことに出会った日」はそれぞれ 30 代，40 代，70 代の女性のご自身のこれまでの人生経験と生きがい語られ，聴く人を魅きつけた。アフリカの大自然の中での野生の動物との出会い，秘書としての仕事の難しさと魅力，40 代になってからの書くことへの挑戦と成功。「映画の中の女性——女性はドラマティック——」は，『ローマの休日』を例にあげて女性の心情の描き方が述べられた。

「私の歩んだ道と秘書の仕事」では、本学での別の講義、すなわち、「秘書概論」で述べられたことを現場の秘書の方の話で一層理解を深めることができる、という感想が寄せられている。

「生活の中のダイオキシン」、「インターネットとビジネス」、「情報化社会の行方」は今後考えなければならない重要な問題ではあるが、地味なテーマであるだけに高い数値ではなかったが、これらは、後述されるように(表14参照)受講生の認識・態度の変化をもたらすものであった。

2) 21世紀を輝く女性の時代にするための現在の気持 (表12)

「まあまあ、なんとかなりそう」(29.8%)と「自信がついた」(7.2%)を合わせた値と「不安」(25.1%)と「見通しは甘い」(11.9%)の合計が同じ値を示している。両者の差は9年(9.6)、10年(5.4)とだんだん縮まってきていてついに差がなくなっている。すなわち、後者の値が増加してきている。21世紀初頭を担う彼女たちの今後の頑張りに期待したい。

3) 現代社会で最も重要なこと (表13)

環境の整備、経済の動向、家庭のあり方の順であり、昨年度より環境の整

表12 21世紀を輝く女性の時代にするための現在の気持 (%)

	平成11年	平成10年	平成9年
まあまあ、なんとかなりそう	29.8	25.0	31.4
今のままの日常が続くと思う	25.5	26.2	37.9
まだ、何もわからず、不安	25.1	21.2	19.3
21世紀が女性の時代となる見通しは甘い	11.9	11.9	6.6
見通しが開けて21世紀を生きていく自信がついた	7.2	13.5	4.1
講義を聞いてかえって混乱してしまった	0.4	2.3	0.7

表13 現代社会で最も重要なこと (%)

	平成11年	平成10年	平成9年
環境の整備	31.6	25.8	45.2
経済の動向	25.1	26.9	8.1
家庭のあり方	16.9	21.5	14.1
国際政治的問題 (民族紛争・難民等)	13.0	12.3	21.9
情報化社会	7.4	4.2	7.4
エネルギー問題	2.6	6.2	—
異文化交流	1.3	1.5	3.2
その他	2.2	1.5	—

備がより重要と認識されたようである。受講前の調査において、21世紀への不安のトップに環境問題があげられており(表1参照)、今年度のシリーズでのダイオキシンの恐怖、自然の環境の素晴らしさ(自然大好き、動物大好き)の話とも相俟っての結果と考えることができるであろう。環境問題(ダイオキシンなど)についての受講後の認識・態度の変化の大きさ(表14参照)からもこのことがいえる。

3. 受講前と受講後の認識・態度の変化について

1) 受講後の認識・態度の変化について(表14と図1-1～図1-12)

12項目について、「変わらない」から「変わった」まで5段階評価と、同時に簡単な理由の記述を求めた。その結果は図1-1から図1-12に示されている。

12項目についての全体的な変化をみるため、それぞれの値を独立と見做すには疑義があるが、大まかな傾向をみるために仮に独立と見做し、12×5のマトリックスによる尤度比検定を行なった。図1において、上向きの矢印(↑)2つは1%の有意水準で、1つは5%の有意水準で他の項目との比較においてその項目を選択した者の比率が高いことを示し、下向きの矢印(↓)はそれぞれの項目を選択した者の比率が低いことを示している。また5段階評価について「変わらない」1点、「あまり変わらない」2点、「どちらともいえない」3点、「少し変わった」4点、「変わった」5点として加重平均値を算出したも

表14 受講後の認識・態度の変化—加重平均値*

カラーコーディネートについて	3.86
環境問題(ダイオキシンなど)	3.65
インターネットの利用法	3.63
自分とファッションについて	3.45
福祉について	3.33
女性の自立について	3.29
チャレンジ、ステップアップについての考え	3.27
町の中のバリア・フリーについて	2.92
自然や動物との関わりについて	2.85
映画の表現について	2.69
家庭のあり方	2.39
結婚に対する考え方	2.01

* 変わらない1点、あまり変わらない2点、どちらともいえない3点、少し変わった4点、変わった5点

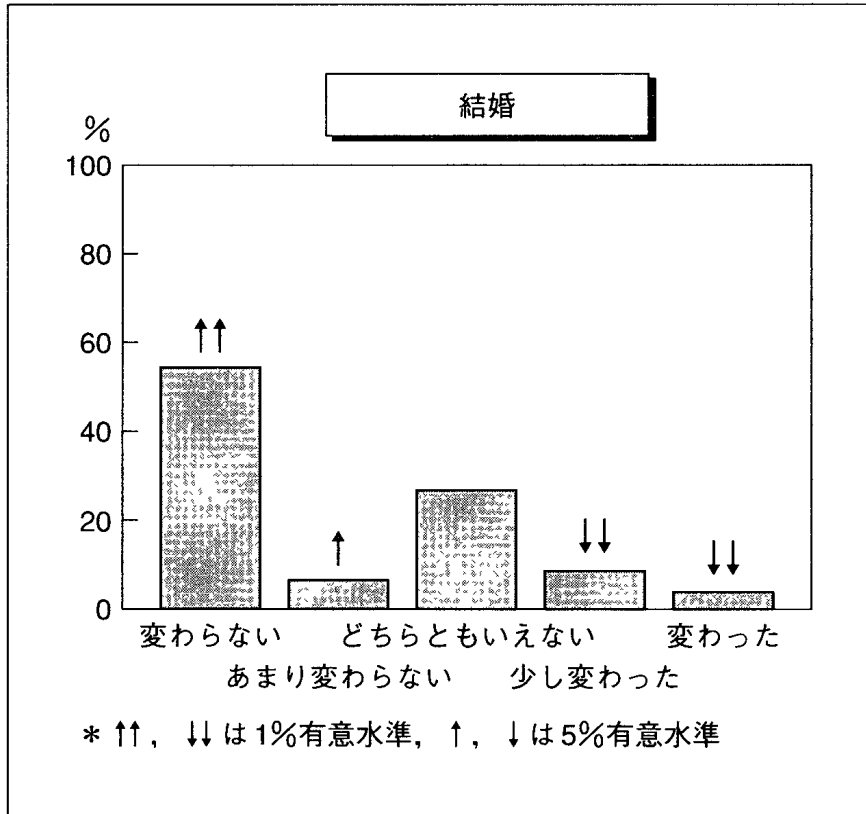


図 1-1

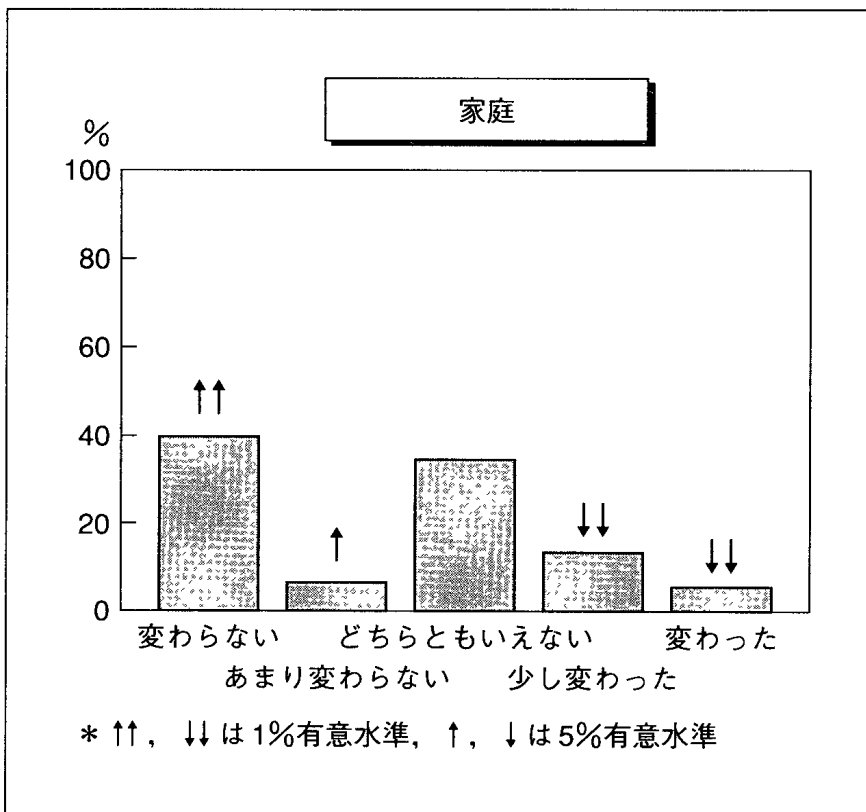


図 1-2

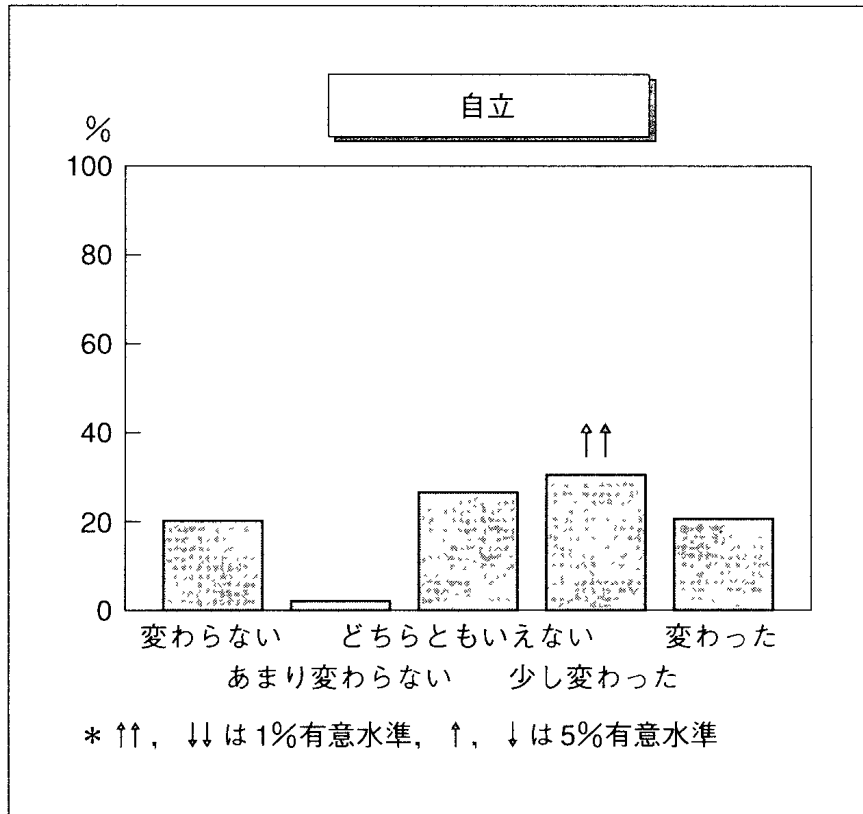


図 1-3

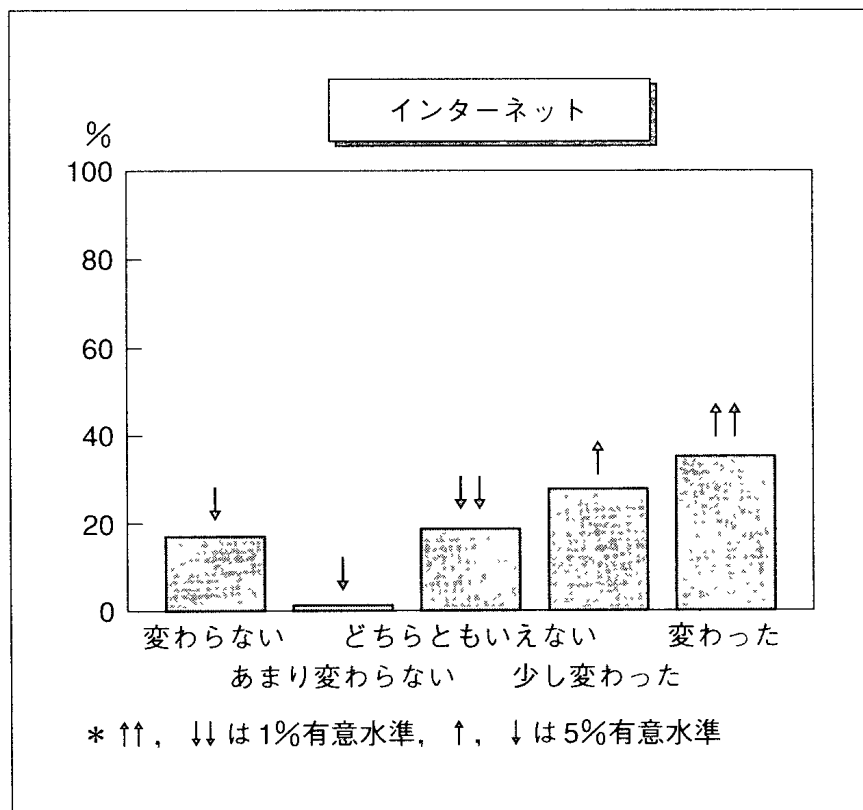


図 1-4

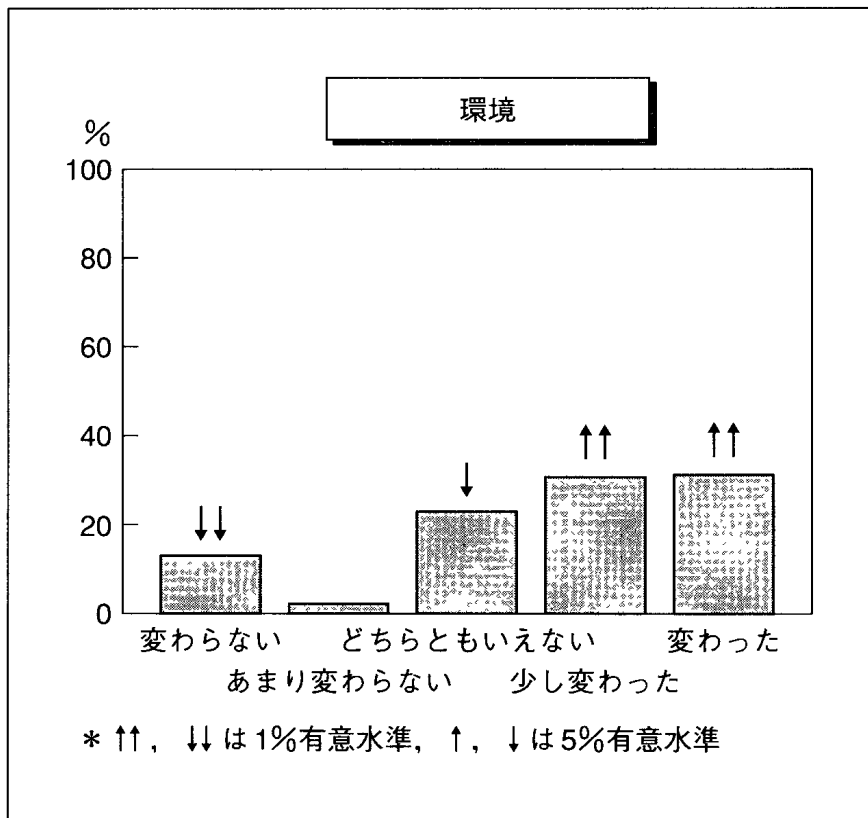


図 1-5

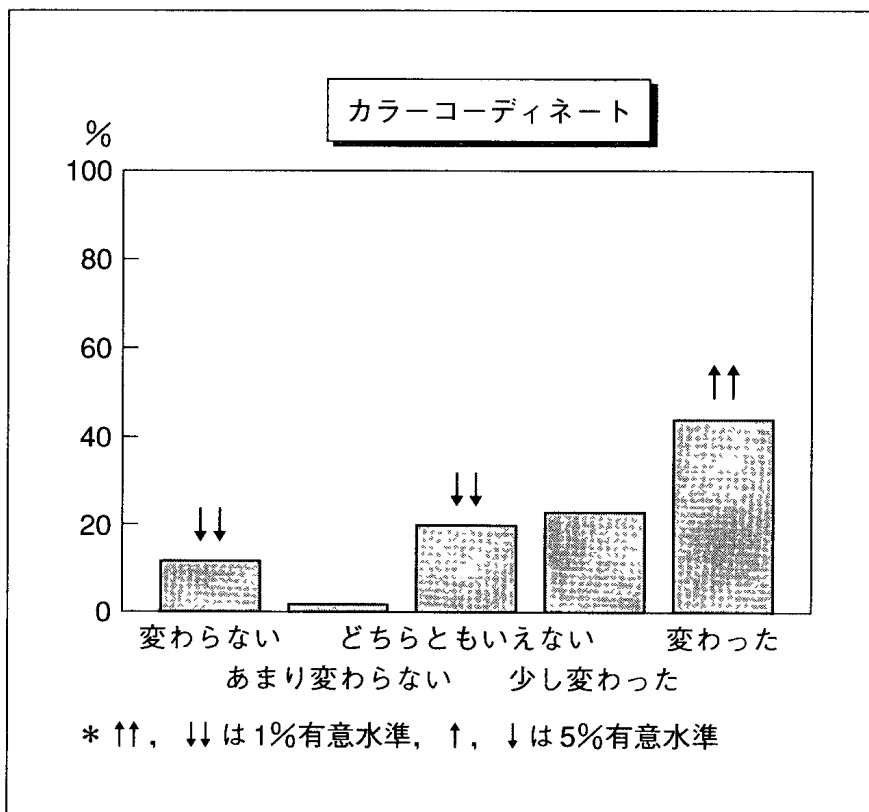


図 1-6

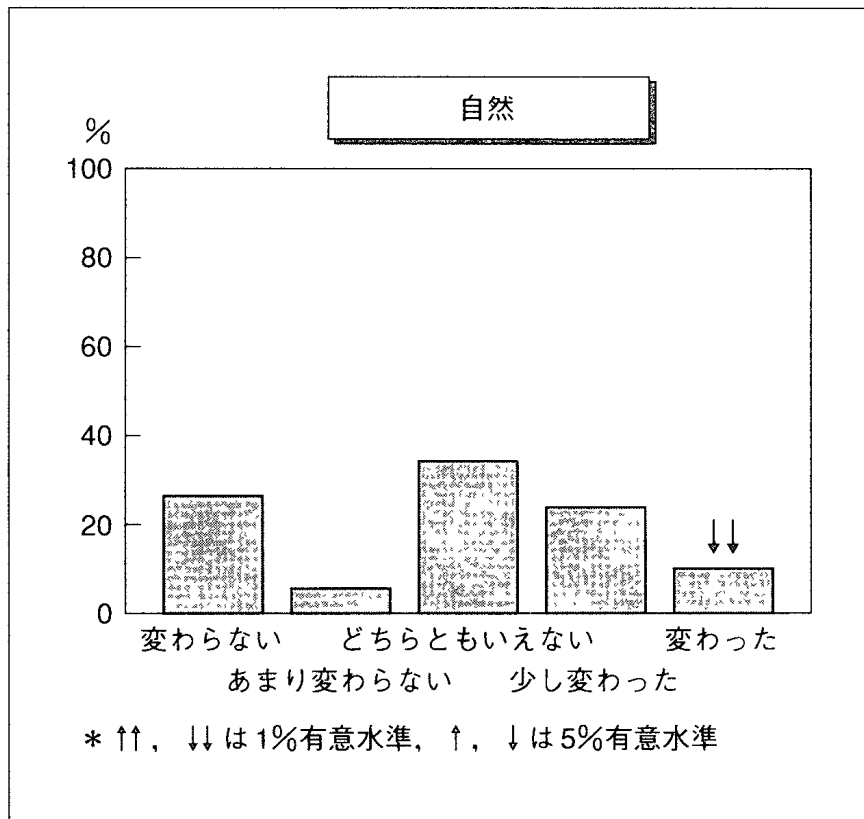


図 1-7

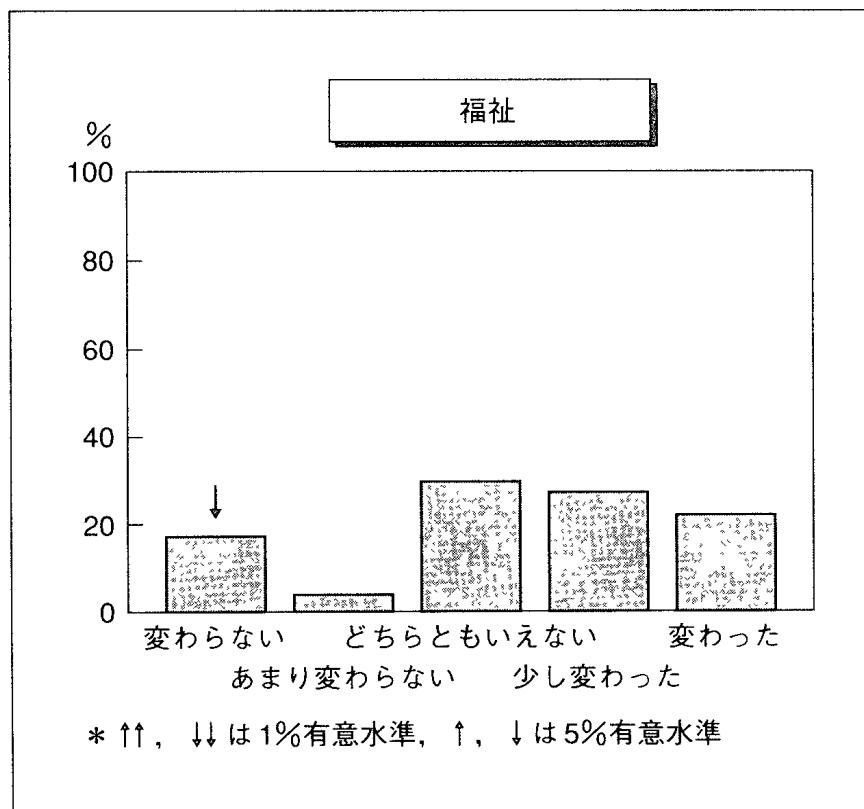


図 1-8

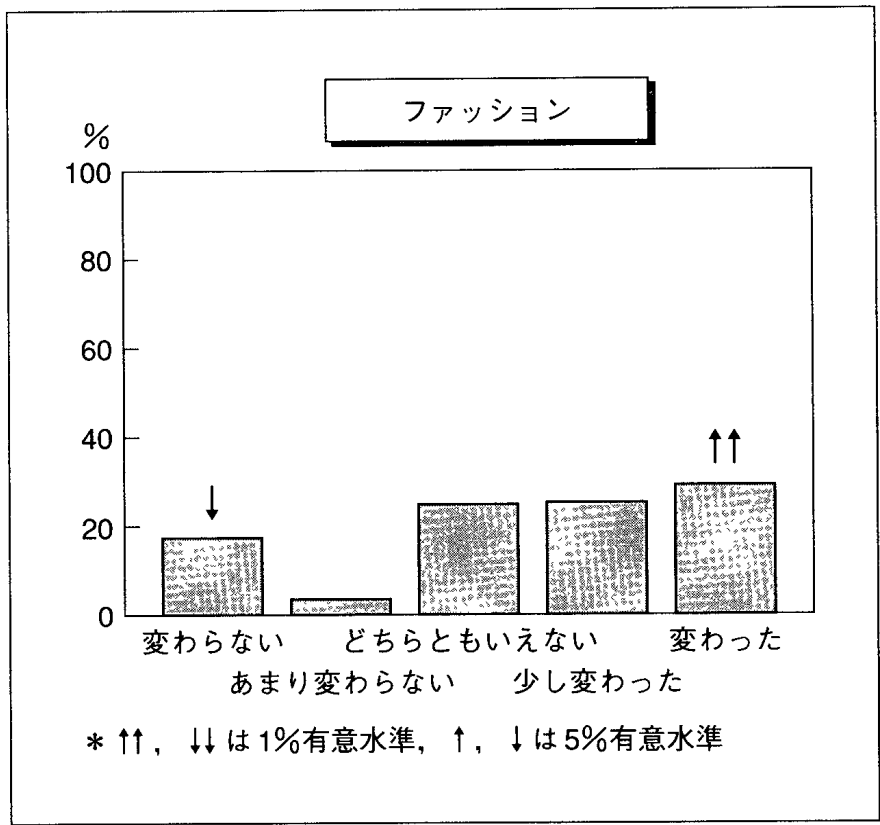


図 1-9

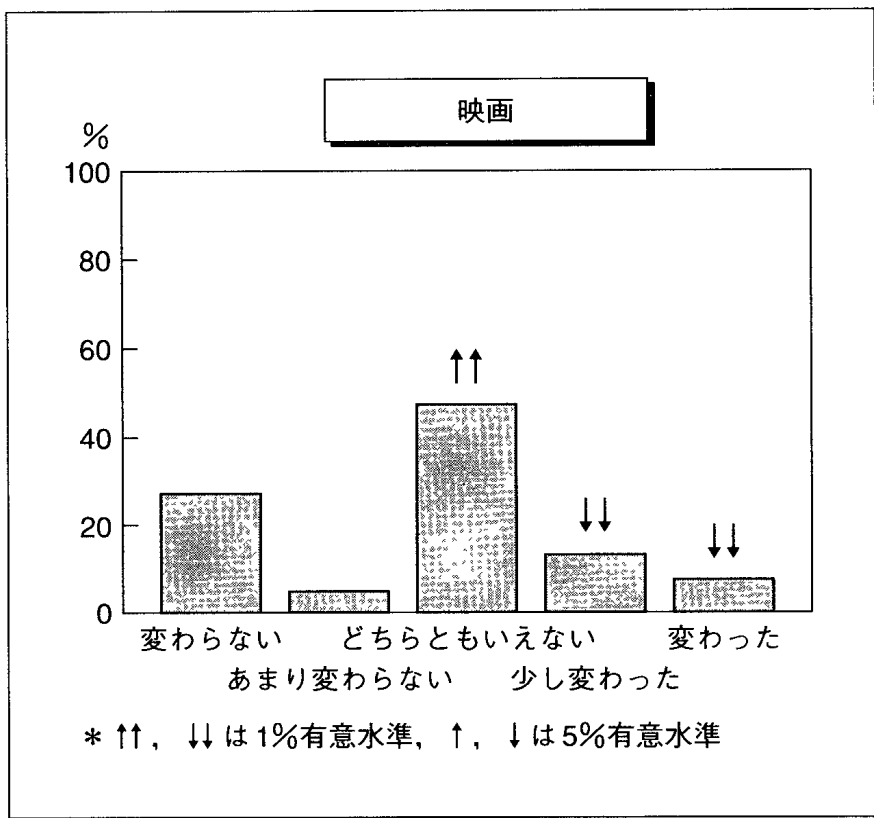


図 1-10

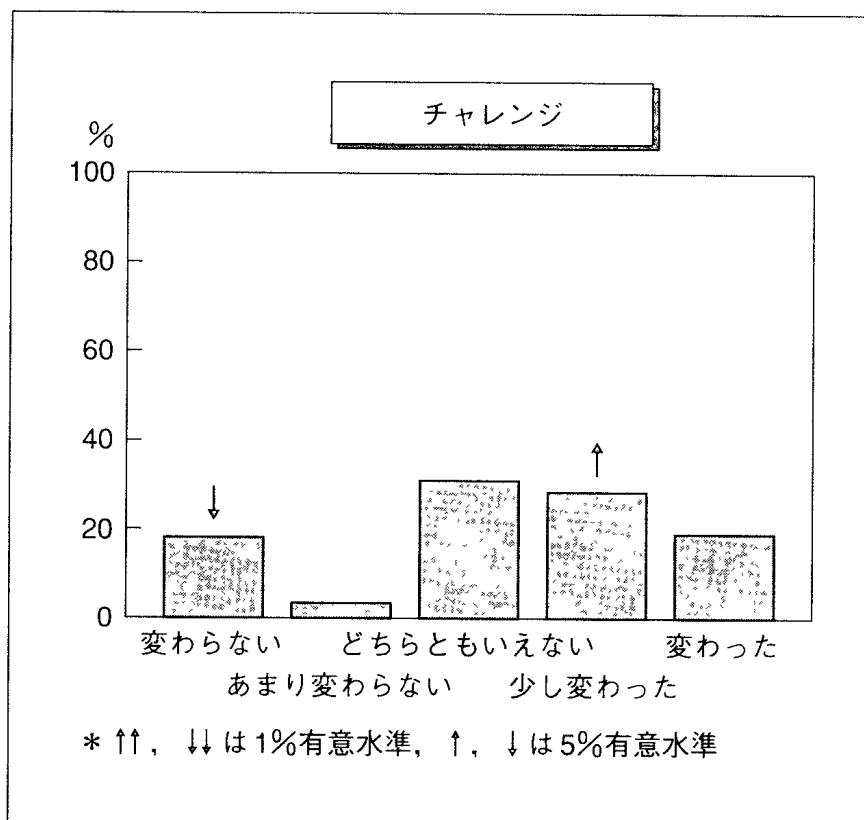


図 1-11

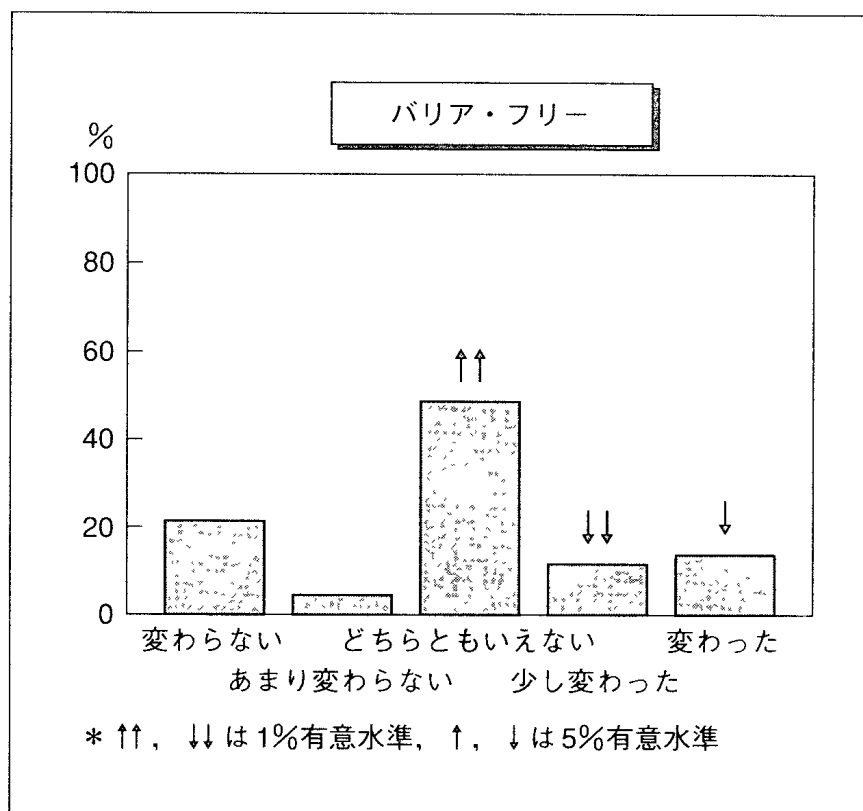


図 1-12

表15 表9に基づく将来の生き方に関する受講前と受講後の態度の関係
(人数と%)

受講前の態度	受講後の態度					
	育児から手が離れたらパートタイムの仕事につきたい	結婚・出産に関わらず仕事を続ける	結婚後、出産したら仕事はずっと辞める	結婚したら仕事はずっと辞める	育児から手が離れたら再びフルタイムの仕事につきたい	結婚・出産に関わりなく仕事にはつきたくない
育児から手が離れたらパートタイムの仕事につきたい (人数) (受講前の人数に対する%)	75 72.8	6 5.8	5 4.9	3 2.9	9 8.7	5 4.9
結婚・出産に関わらず仕事を続ける (人数) (受講前の人数に対する%)	3 7.7	25 64.1	2 5.1	0 0.0	8 20.5	1 2.6
結婚後、出産したら仕事はずっと辞める (人数) (受講前の人数に対する%)	14 41.2	4 11.8	2 5.9	0 0.0	13 38.2	1 2.9
結婚したら仕事はずっと辞める (人数) (受講前の人数に対する%)	11 44.0	2 8.0	3 12.0	6 24.0	2 8.0	1 4.0
育児から手が離れたら再びフルタイムの仕事につきたい (人数) (受講前の人数に対する%)	0 0.0	1 12.5	2 25.0	3 37.5	2 25.0	0 0.0
結婚・出産に関わりなく仕事にはつきたくない (人数) (受講前の人数に対する%)	0 0.0	0 0.0	1 50.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0

のが、表14である。

図1に示された尤度比検定の結果と表14の加重平均値から、突出した変化の大きいものはみられないが、カラーコーディネート、環境問題(ダイオキシンなど)、インターネットの利用法、が変化のみられた項目といえよう。

2) 将来の生き方の受講前と受講後の変化について(表9および表15)

全体的な変化をみるため、表9に基づき2×6のマトリックスによる尤度比検定の結果は、他の項目との比較において、受講前「結婚後、出産したら仕事は辞める」を選択した者が受講後は減少し(5%水準)、また「結婚したら仕事はずっと辞める」を選択した者も受講後減少したが(5%水準)、逆に受講前「育児から手が離れたら再びフルタイムの仕事につきたい」を選択して

表16 リサイクルおよび環境への配慮の実行について (%)

		◎	○	×	印なし
牛乳パック	(受講前)	29.1	44.3	9.0	17.6
	(受講後)	33.5	44.6	3.4	18.5
発泡スチロールトレイ	(受講前)	20.5	32.8	20.1	26.6
	(受講後)	24.5	39.9	8.6	27.0
ペットボトル	(受講前)	30.7	45.9	5.7	17.6
	(受講後)	48.9	40.8	3.4	6.9
ビン・缶	(受講前)	48.8	32.8	2.5	16.0
	(受講後)	58.4	34.3	0.9	6.4
古紙	(受講前)	29.6	34.2	11.9	24.3
	(受講後)	36.9	36.5	4.7	22.3
衣類	(受講前)	11.1	29.6	26.7	32.5
	(受講後)	15.0	41.6	9.9	33.5
ボタン電池・乾電池	(受講前)	19.3	25.0	25.8	29.9
	(受講後)	22.7	38.6	9.4	29.2
ゴミの減量	(受講前)	14.4	48.6	14.0	23.0
	(受講後)	27.9	47.6	6.9	17.6
合成洗剤の不使用	(受講前)	4.9	30.9	34.2	30.0
	(受講後)	5.6	31.8	24.5	38.2
エネルギーの節約	(受講前)	25.5	32.9	16.9	24.7
	(受講後)	28.3	43.8	7.3	20.6
殺虫剤の不使用	(受講前)	3.7	12.3	49.6	34.4
	(受講後)	5.6	19.7	34.8	39.9
影響を考慮した携帯電話の使用	(受講前)	11.5	28.3	28.3	32.0
	(受講後)	21.5	32.6	19.7	26.2
その他 (買い物袋不使用など 具体的に)	(受講前)	9.0	12.3	14.3	64.3
	(受講後)	9.9	18.0	6.4	65.7

- ◎：受講前＝リサイクルおよび環境への配慮を実行しているもの
 受講後＝リサイクルや環境への配慮について絶対実行するもの
- ：受講前＝気になっているがいつも心がけているわけではないもの
 受講後＝やってみようかなと思うようになったもの
- ×：受講前＝全く考えたこともないもの
 受講後＝とてもできそうにないもの
- 印なし：いずれでもないもの

表 17 リサイクルおよび環境への配慮の実行
 についての受講前後の変化について*

(受講後得点－受講前得点) の分布	人数
－15 未満	1
－15 以上～－10 未満	2
－10 以上～－5 未満	15
－5 以上～0 未満	50
0 以上～5 未満	74
5 以上～10 未満	55
10 以上～15 未満	14
計	211

* ◎を2点，○を1点として，項目ごとに算出した個人ごとの合計得点の受講後と受講前の差

いた者は受講後増加（1%水準）していることがわかった。

さらにこの点について個人ごとに受講前と受講後の変化を調べてみたのが表 15 である。受講の前後で態度の変化した者としなかった者の分布を尤度比検定で調べてみたところ，受講前「結婚後，出産したら仕事はずっと辞める」を選択した者が有意に（1%水準）変化し，また「結婚したら仕事はずっと辞める」と「結婚・出産に関わりなく仕事にはつきたくない」を合わせた者（後者の分布が極端に少ないので便宜的に合算）が有意に（1%水準）変化していた。そこで受講後どの態度への変化がみられたのかを検定してみると，「結婚後，出産したら仕事をずっと辞める」から「育児から手が離れたらパートタイムの仕事につきたい」および「育児から手が離れたら再びフルタイムの仕事につきたい」へと変化していた（1%水準）。また「結婚したら仕事はずっと辞める」と「結婚・出産に関わりなく仕事にはつきたくない」から「育児から手が離れたらパートタイムの仕事につきたい」へと変化していた（1%水準）。

これらの結果を総合すると，いずれ仕事を辞めたいと考えていた人がフルタイム，あるいはパートタイムで仕事を続けたいと考えるようになっていくことがわかる。これはこのシリーズを通しての女性の講師の方々の生き方に動かされたといえるであろう。

3) リサイクルおよび環境への配慮の実行についての受講前後の態度の変化について（表 16 および表 17）

受講前と受講後の問い方に若干違いがあるので，厳密な比較は疑義がある

が大まかな傾向を表 16 でみると、項目によってほとんど変化のないものもある（衣類、合成洗剤の不使用、殺虫剤の不使用）が、例えばペットボトル、ビン・缶、ゴミの減量、影響を考慮した携帯電話の使用は実行へと変化している。

◎を 2 点，○を 1 点として，個人ごとに各項目の得点を算出しそれを全項目合計した得点の受講後と受講前の差をとり，分布であらわしたのが表 17 である。これによると受講後得点が減じている学生ももちろんいるが，増している学生の多いことが読み取れる。これについては今後個人ごと，各項目ごとの得点の分布の差の違いを調べる必要があるであろう。

4. 社会人の受講者のアンケートおよび懇談会での意見について

このシリーズで最も関心を持ったテーマは「活かして生きる」であった。次いで「インターネットとビジネス」，「書くことに出会った日」，「映画の中の女性」，「生活の中のダイオキシン」が同じ位であった。どれも興味があつて甲乙つけられませんという回答も 2,3 あつた。学生と異なっていたのは「インターネットとビジネス」「書くことに出会った日」と「映画の中の女性」が挙げられていたことである。「インターネットとビジネス」はパソコン，インターネットについての実例をあげての分かりやすい説明が，社会人の世代に関心をひきをこしたと考えられる。「書くことに出会った日」は社会人の受講者の中には高齢の方もいて講師と同世代であるということが共感をよんだと思われる。「映画の中の女性」については映画『ローマの休日』を例にあげての話が関心をよんだのではないかと思われる。

学生の態度については，受講態度の悪さ（私語，居眠りなど），服装などについて指摘がなされたが，中には自分たちの若い頃を思い出すと同様であつたなど理解を示そうとする人もいた。

社会人の方々は非常に熱心な態度で受講し，必ず質問，意見が出た。このような社会人の態度は学生にも良い影響をもたらしたといえる。学生の感想の中に自分たちと世代の異なる人々と席を共にすることは緊張感を味わうとともに異世代の人の意見が聞けるのはとても良かった，熱心な態度に感心した，とあつた。また社会人の方からは，若い世代の人と席を共にするのは学生時代に戻ったようで楽しい，若返る，若い人たちの意見，ファッションに接するのは今時の若者を理解するのに役立つ，などの意見が出された。

そのほか，われわれの総合基礎科目について，有意義であつたと厚木市の広報誌に投稿してくださったり，受講後講師の方へ手紙を出されたり，ある

いはわれわれにお礼の言葉とともに来年度も楽しみにしているというありがたいお手紙をいただいたりしている。

社会人の参加は学生にとっても(社会人にとっても)、普段あまり機会のない異世代間コミュニケーションの場となり得る、相互理解の場になり得るという意味でも意義のあることであると考えられる。

V. 考察

今年度は世代の異なる女性の方々を講師に多くお迎えして生きざまを語っていただいたことが、共感をよび、学生にとっても今後の大いなる指針となったようである。さらに環境問題、インターネットを始めとする情報化社会の問題、障害を持つ人々に対する態度、ボランティアのあり方などについても考える機会を与えることができた。これらが受講生の将来の生き方の変化となって現れたのではないか、またそうであって欲しいと願っている。

以上の結果を以後の短大の生活に結びつけて活かしていくにはどうすればよいか、これからのさまざまな授業の中で関連づけることが必要である。

そのためには、他の教養基礎科目においても、あるいは専門科目についても授業の効果についての調査が不可欠であろう。

VI. おわりに

社会人の参加を企画してから3年になる。その意義を考えつつ来年度にむけて新たな方向性を見いだすべく努めたい。

今年度の講師の方々にここでお礼を申し述べるとともに、積極的にご参加くださった社会人の受講者の方々にも感謝の意を表したいと思う。

参考文献

- 1) 永田照子, 小川真理子「一般教育における『総合基礎科目』の役割」, 飯山論叢, 第15巻第1号, pp. 44~62, 1998.
- 2) 永田照子, 小川真理子「一般教育における『総合基礎科目』の役割—その2—」, 飯山論叢, 第16巻第1号, pp. 88~105, 1999.